

新・農業経営者ルポ／第 154 回

久留米をけん引する “Agrizmer”



小社では2006～11年、『Agrizm』（アグリズム）という若手農家のみを取り上げた季刊誌を発行していた。その09年12月号の「Hans & Hope」なるコーナーに登場していた当時27歳の田中圭介（福岡県久留米市）の目標が気になった。

「35歳、ベンツに乗る」

今年で35歳を迎える彼はその後、どうなったのか。そして、ベンツの行方は。

文・撮影（6ページ、写真③）／永井佳史、写真提供／田中農園

3月下旬といえば児童や幼稚園児は春休み期間中に当たる。福岡空港からレンタカーで南下し、久留米の田中の農場に着くと、戸外で出迎えてくれた彼の隣で小さい子どもたちがはしゃいでいた。一人は、アグリズムで田中に抱きかかえられて一緒に写っていた当時生後間もない長男の瑛仁くんだろう。妹と連れだって仲良く動き回っている様子を見ると、田中のいいお父さんぶりが想像できる。同時に、田中の柔和な表情からは、かつて誌面で掲げていた「35歳、ベンツに乗る」などという目標を口にするような人物とは思えない節があった。

高校の寮生活で実感した農家のメシのおいしさ

田中は小学4年で水泳を習い始める。元々ぜんそくを患っており、学校の授業や夏休みに楽しんでいたプールでそれを克服できればと考えたことだった。

その後、中学3年で出場した福岡県大会で転機が訪れる。試合会場に後に進学することになる九州産業大学付属九州高校の水泳部の監督がいたのだ。同校は全国区として知られ、田中の後輩には12年のロンドンオリンピック水泳・競泳女子200m平泳ぎで銀メダルを獲得した鈴木聡美さんがいる。田中のスイミングクラブのコーチとその監督とが先輩・後輩の間柄だったことで強豪校への道が開かれた。

中学時代とは比べ物にならないくらい練習に必死に食らいついていくと、インターハイへの切符を手にするレベルにまで達する。残念ながら本戦では予選落ちしたものの、同じ平泳ぎではオリンピック2大会連続2種目金メダリストの北島康介さんがエントリーしていた。

前述の転機とは競技そのものではない。高校での寮生活が関与している。

「実家も高校も福岡県内なんで離れ

ているわけではないんですけど、とにかく地元が好きで早く帰りたいかったです。というのも、朝昼晩と学食で食べるメシがあまりおいしくなかったのが一番ショックでした。それと後継ぎのことですね」

田中には兄と姉がいる。父親からは後継者と目されない立場にいたが、田中が高校2年のときに彼にお鉢が回ってくるような状況になった。農業に取り組めることより地元に戻れる理由が見つかったことが最大のメリットだったが、かといって農業をないがしろにしようとしたのではなく、父親と話し合うなかで将来に向けたステップをきちんと踏み出すことにした。

1回生にして体育会水泳部のキャプテンに就任、バスケ大会などイベントを開く

大学進学にあたっては水泳部の監督とも相談し、実家の農業を手伝いながら通学可能な久留米大学を選ぶ。学部は数あるなかから経済学部を決めた。

「経済学部というのは社会的なことをいろいろ勉強できると思ってのことです。それ以外では親父の意向がありましてね……。農業は大学出てから実地で学べばいいとか、そもそも大学では単位なんか必要がない

田中農園

田中 圭介

福岡県久留米市

たなか・けいすけ 1982年、福岡県久留米市生まれ。小学4年から水泳を始め、九州産業大学付属九州高校でインターハイに出場する。久留米大学経済学部を卒業後、就農。全国農業青年クラブ連絡協議会の副会長を務めたほか、2010年に小社が実施した豪州ビクトリア州農業視察にも参加している。

と言うんです。卒業も求めていないと。4年間、大学に行くことを考えろということなんですけど、つまり単位を取れなくて1回生で4年ダブって退学してもかまわないという考え方です。実際、授業にはあまり顔を出さなかったんですけど、青春を取り戻すために大学には毎日行きましたね（笑）

大学に通う目的の一つになる水泳は体育会で続けた。だが、入部は勧誘されてのことで、スポーツ推薦でも自発的でもなかった。水泳部自体も弱小で、顧問もおらず、学生の自主的な運営に委ねられていた。田中からしても競技としての水泳は高校までで十分という気持ちだった。

この水泳部では4回生は就職活動に専念するため、3回生の秋で退部する慣例があった。ちょうど田中の1学年上が誰もいなかったことから、彼が1回生の途中でキャプテンを任されることになる。ここからいまにつながる協調性を備えたリーダーシップが形成されていく。

「農村出身ですけど、小さいころには近所にいたお兄ちゃんたちとボール投げだったり、サッカーだったり、水泳以外では柔道やミニバス（トボール）を習って遊んでいました。スポーツはなんでもやっていたが、タイプで、競争というよりみんなで戯れ



久留米大学水泳部時代の田中。高校では寮生活で水泳漬けの日々を送り、平泳ぎでインターハイに出場した。

ることに居心地の良さを覚えていましたね」

小学校の高学年こそガキ大将然として振る舞っていたそうだが、中学や高校では周りを統率するようなことはなかったという。

そんな田中が3回生から指名されたことでキャプテンになった。ここでも従来の延長線上にはないイベントを次々と企画し、九州に一大ムーブメントを起こしていく。

「単純に水泳だと九州では福岡大学が強いんです。でも、水泳部員によるバスケ大会なら勝てるんじゃない



自宅のトイレに飾るベンツのポスター。購入を夢見ていたが、総合的に判断してひとまず断念した。それでも、目標を掲げたときの気持ちを忘れないとあえて張り続けている。

かと思って九州各地の大学の水泳部に通知し、オフシーズンにウチの大学に来てもらってバスケ大会を開きました。まあ、バスケでもコテンパンにやられたんですけどね（笑）。サッカー大会もしましたし、違う大学に練習や合宿に出向いたり、結構積極的にさまざまなことをやりました。そういうのがやっぱりおもしろかったですね」

もちろん、自分が預かる水泳部の練習場所を確保したり、練習メニューを組んだり、大会に申し込んだりと、日常業務と並行しての行動

になる。また、学内には医学部があり、田中より年上の4回生もいた。未熟さゆえにいっぱい粗相してものすごく叱られたというが、めげることなく改善を繰り返して、最後まで任期を務め上げた。そういった上下関係に辟易し、辞めていった同期や後輩がいたなかでのことだった。

実用性からベンツを見送る

田中の農場は筑後平野に位置し、北に九州最大の筑後川が流れ、南に耳納連山がそびえる風土にある。肥沃で水はけも悪くなく、コメでも野

久留米をけん引する“Agrizmer”



すべてリーフレタス畑になる。①は11月下旬に撮影した定植作業の一コマで、③は今回の取材日の3月27日にカメラに収めた。いずれも遠方に耳納連山が見える。②の写真上側の土手の向こうには筑後川が流れる。

菜でも果樹でも作ればなんでも取れる地域だという。田中の父親は周囲に比べ規模や品目が多いわけではなかったが、地元では一目置かれる存在だったようだ。就農時の田中はお前の親父にはかわいがられたよとたびたび声をかけられたという。

両親と農作業に励む一方で、田中は4日（農業青年）クラブの活動にも精を出す。大学時代の水泳部と変わらず交友範囲を広げ、地元では得られない刺激を受けた。

東京とかで全国大会があると、帰ってきた日なんかはとくにやる気が出ました。地元での話といえど、ネガティブになりがちですけど、全国大会で出会うみなさんは前向きですからね」

田中は最終的に全国農業青年クラブ連絡協議会の副会長にまで上り詰めている。小社が10年春に実施した豪州ビクトリア州農業視察には、当時会長でアグリズム編集長でもあった萩原昌真（南信州ファーム萩原、長野県東御市）に声をかけられて同行した。

その数カ月前に発行されたアグリズムに当時27歳の田中が登場している。誌面にはこんな目標が掲載されていた。

35歳、ベンツに乗る
45歳、自分の店を構える
60歳、海外で暮らす

田中は今年で35歳になる。まず、ベンツについては家族構成から見送ることにしたという。

「掲載当時から子どもが増えまして3人になりました。ベンツはすごく欲しくていまもトイレにポスターを飾ってあったりするんですけど、実用性を考えて半年ほど前にミニバンを買っちゃいました。あのころはステータスが欲しかったんですよね。経営規模にしても大きいほうがいいし、年収も多いほうがいい。歳を重ねるごとに理想が現実のほうに引張られてきました。35歳になるまでもう少し時間があるんですけどしたらベンツを買うかもしれないですね」

ど、だとしたらその前にトラクター
でしょうね」

ちなみに、45歳の店舗経営に関し
ては意欲をのぞかせており、60歳か
らの海外暮らしは日本の魅力を実感
することで希望が薄れてきていると
いう。

親世代にも物怖じせず物申す

先ほどのベントンの件ではないが、
田中の発想は堅実そのものだ。これ
は彼の父親も共通している。田中が
働き手として加わるにあたり、経営
規模や作付品目を増やしてもよさそ
うなものだが、多少の規模拡大は進
めても、品目は縮小路線に舵を取っ
た。

「現在もそうですけど、主力はリー
フレタスでしたね。このあたりは農
協への出荷率が高く、大規模農家で
も全量を農協に回す人がいるくらい
です。我が家のリーフレタスも農協
出荷なんですけど、これと収穫時期
が重なるハクサイは半分の面積に、
キャベツは完全になくしました。ゴ
ボウも今年から手を引きます。その
分、リーフレタスに集約します」

どれも田中が、地域では怖いと恐
れられていた親父に、進言すること
で実現してきた。その対象は父親だ
けにとどまらず、所属農協の年配方
が取り仕切る生産部会も含まれてい

る。

「新しい品種や品目をどんどん試し
ましょうと提案しています。それこ
そもうバンバンぶち当たっています
ね。

農家が思ういい農産物と買い手が
いいと思う農産物とは違いますよと
いう話もしています。肥料をたくさ
ん与えて量が取れば収入は上がる
でしょう。でも、施肥も過剰なら吸
収されずに畑に残ってしまいますの
で、そこをうまくコントロールして
経費を抑えることも利益の一つに結
びつきますよと発言しています。そ
の直後に口だけじゃ野菜は育たんと
か言われるんですけどね(笑)」

農業界の外部からは至極当然と映
る田中のこういった言動も、農村社
会にどっぷり浸かった人間には理解
されないことが往々にしてある。し
かし、ここでくじけるような人物で
はない。もう一つ彼の奮闘ぶりを如
実に示すエピソードを紹介したい。
これは近隣でリーフレタスを生産す
る農協との協業を模索するものにな
る。

「隣の畑と比べると、産地間競争
なんてなくなりましたいいんです。もう
そういう時代じゃない。近隣で同じ
農産物を生産する農協があれば、そ
こに勉強させてもらいにいくとか、
出荷ルートを教えてもらおうとか、場



4 5 お節料理で使われる金時ニンジン。人手をかけて1日で50a分の収穫を終え、洗浄、選別、箱詰めを経て出荷する。5の写真の右側が長男の瑛仁くん、左側が次男の玖くん。

6 枝豆は農協出荷ではなく、個人で卸す。形態も枝付きの本来の枝豆にこだわっている。

「これは親父が始めたものなんですけど、市場からの受けが良くて続いています。でも、逆に手間がかかるんで儲けはあまりないんですけどね。周りでもだいぶやり始めたんですけど、どこもやめちゃいました。ウチはこのスタイルをずっと貫きますよ」(田中)



農協から生産を委託されている田苗。1万枚50ha分に相当する。

合によっては一緒にやりましようとか、それくらいのことをするべきだと思います。とくにリーフレタスなんかは味がどう

のこのじゃなく、安定供給が大事なんです。ウチの農協の部会は小さいですから、僕がそういう働きかけをしているんですけど、先方にも似た思想の人がいて、農協の垣根を越えた部会の合併話が実を結びそうになってきました」

大学の水泳部や4日ク

ラブで鍛えた物申す姿勢は地元の農業をも変える原動力になっている。

一 農業青年からの飛躍

田中はいま、岐路に立っている。

農場の労働力は田中に両親、それにピーク時で最大20人前後のパートタイマーになる。4haで作付けするリーフレタスを中心に、ハクサイや金時ニンジン、枝豆を露地栽培で生産し、4haに及ぶ水稲のほか、水稲とタマネギの育苗も手がけている。家族経営では限界ギリギリにまで至っているのが実情だ。

そんななか、田中の父親が肩の治療でこれから3カ月間、離脱する予

定になっている。母親も年末にろっ骨を痛め、一月にわたってほぼ何もできない状態に陥った。二人とも60代に突入し、両親を抜きにした経営というのも検討しなければいけない時期にきている。

「労働力問題は深刻ですね。先日もそのことで友人と話したばかりです。パートさんも高齢化していますし、海外からの実習生を雇用することも周りでやり出しているところがありますので必要だと感じています。ただ、そのためには夏場の仕事も作らないといけないわけですけど、台風や大雨のことを考慮すると悩んじゃいますね。豪雨となれば冠水もありますし」

それでも、実習生の受け入れやハウスの建設は数年内に実行するだろうという。

アグリズムの取材時から突き抜けれなかったといえそうかもしれない。とはいえ、田中は立ち止まらず、持ち前のバイタリティーで周囲を巻き込みながら常に突き進んできた。自分中心だったらベンツを購入していたかもしれないが、彼には愛する家族があり、何より地元が大好きだった。個人としての田中の今後の未来も期待せずにはいられない。

(文中敬称略)